

明けまして

おめでとーございませう。

本来は人間同士で交わす言葉ではなく、「年の神」への祝福の言葉だったようです。

年神様は農耕神であると同時に祖先神でもあり、正月は松飾りを目印にしてやって来ます。日本の神々を愛してやまなかった小泉八雲は、初めての正月を羽織はかまで迎えたそうです。そう言えば私の小学時代には学校で年賀式が行われ、PTA会長さんが羽織はかま姿で念頭のあいさつをしていたことを思い出します。

正月の風景もずいぶん様変わりしました。神に供えたお下がりを、家族みんなで食べ合うものだったおせち料理は、今やパートの目玉商品になってしまい、神が宿ると言われる餅を食べて、その力をもらうのがお年玉だったものが、今や小遣い銭のようになってしまいました。

正月三日は多くの商店が休みだったのですが、最近では大型店舗やコンビニも通常どおりの営業を行い、テレビでは常にも増してお笑い番組のオンパレードです。

伝統的な行事が時代とともに変わっていきのはやむを得ないとしても、神様を迎えるにふさわしい厳肅さが失われた正月は寂しい気がします。

家族の絆を大切にすることは不易なるものです。

「人の命というものは、お父さまお母さまから…、もつと端的にいえば、神様から頂いたもの。神様から頂いた命はまず自分の命を大切にしなければならぬし、人様の命もあやめてはならない。命を軽んずる風潮が強まるのは、日本人の多くが現世を超越した何者かに、畏怖する心を失った結果ではないでしょうか。」と話した首相がいました。

人は両親や生まれた土地、さらに文化や伝統、歴史から切り離せないものとして存在しています。

元旦、津々浦々で家族だんらんや一族再会の幸せを久しぶりにかみしめた家庭も少なくないことでしょう。

伝統や風習、歳事や儀式が年ごとに薄れ行く今日、正月は日本人にとってお盆と並び家族だんらんの光景が辛うじて相応しい時です。

昨今の社会現象を憂える時、その根元は空洞化し揺らぎ始めているように思います。日本人と日本の社会を支えてきた倫理や道徳、伝統、克己心といったものは、どうなってしまうのか反省させられます。

凜とした日本人の心を忘れないためにも、新年にあらためて思うのは日本の家族や家庭、そして地域社会は大丈夫なのか、その価値を今こそ見直す必要があります。

煩悩は百八減って今朝の春  
夏目漱石

## 念ずれば花ひらく

日本は「子どもの楽園」と言った人がいました。

世界中で日本ほど、子どもが大切に扱われ、そして子どものために深く配慮が払われる国はありません。子どもたちは素直で、決してうそを言ったり、過ちを隠したりしません。うれしいことも悲しいことも父や母に話し、一緒に喜んだり涙を流したりして心を通わせています。

集落には鎮守の森があり、そこは年齢に関係なく「遊び」・「学ぶ」場所になっていました。まさに「子どもの楽園」そのものであり、外国人に映っていた地域の風景です。決して大昔のことではないこれら目撃談に、私たちの多くは隔世の感を覚えます。

子どもを心からかわいがり育てた親たちの姿がなくなりつつありますが、ほのぼのとした地域や家庭が今ほど求められている時代はありません。

笑顔に満ちた地域をつくるために共生・協働の社会の実現が求められています。

隣人を思いやり、苦悩を分かち合う共同体意識の再生が求められている昨今、家族は社会や国づくりの一番の基礎であり、家庭と共同体の再生は必要不可欠です。

新しい年には夢という言葉がよく似合います。壁にかけてあるカレンダーやまだ何も書かれていない日記に、何だか今年はいいいことがあるような、そんな気持ちになります。

夢。それは「実際には有りそうにも思われないが、万一実現すればいいなあ」と思っている事柄」と辞書にあります。夢は叶えたいものです。私たちは、さまざまに願いや思いを胸に秘め生きています。

人間には煩惱という「欲」もありますが、108の「煩惱」を追い払い、新たな夢を実現する年にしたいものです。

苦しいとき

母がいつも口にしていた

このことばを

わたしもいつのころからか

となえるようになった

そうしてそのたび

わたしの花がふしぎと

ひとつひとつ

ひらいていった

「念ずれば花ひらく」で知られる詩人・坂村真民の言霊に胸を打たれます。

幸せの花をいっぱい咲かせるために、ひたすら念じたいと思います。

指宿市長